

# 武蔵野ジャーナル Musashino Journal vol. 27 April 2019

武蔵野大学

武蔵野大学高等学校・武蔵野大学中学校  
武蔵野大学附属千代田高等学院・千代田女学園中学校  
武蔵野大学附属幼稚園  
武蔵野大学附属慈光保育園  
千代田インターナショナルスクール東京(CHIST)

1

号

館

特集

成長率No.1の教育プログラム

2 号 館



## 「徳川の平和」とは何か ―連載「將軍の世紀」によせて―

第82回教養講座は2018年12月8日(土)、武蔵野キャンパス雪頂講堂で開催されました。講師を務めるのは山内昌之氏。本学特任教授であり、「20世紀を振り返り21世紀の世界秩序と日本の役割を構想するための有識者懇談会」のメンバーでもある立場から、徳川家康の生き様を振り返り、現代の平和へとつなげる思いが語られました。

**徳川家康の功績を振り返ることで、これからの日本の姿を考える**

現代日本の政府と天皇の関係は、江戸時代の幕府と朝廷の關係に相通じるものがあります。2019年に今上天皇の生前退位と新天皇の即位が決まり、新しい時代を迎えるタイミングを前に、歴史をひも解いて先人たちの智慧や行動の核心に迫ることで、今後の日本を考える一助としたいと考えた山内昌之教授。『文藝春秋』誌で連載中の歴史コラム「將軍の世紀」の執筆を通じて、徳川將軍たちの研究を続けています。

まず着目したのは、徳川初代の征夷大將軍である、徳川家康の人物像。混迷を極めた戦国時代を終結させ、それから約270年にわたる安寧の時代の祖を築き上げた名將軍の生き様や人間力は、学ばべきところが多いといえます。天下人となった後の徳川家康は、安定した平和の世を保つべく、どのようなことに取り組んでいったのか。今回の教養講座では、江戸時代の將軍と天皇の生活様式の違いなどを交えつつ、徳川家康について深察

した研究の一端が語られました。

**国内に秩序を取り戻すための優れた政治手腕と強運**

「私にとつては、戦国時代を描いた時代劇を家族そろつて平然と観ていられることが不思議です」と静かに問題提起した山内教授。「農民から武士に至るまで多くの国民が犠牲を強いられて苦しんだ時代のことが、テレビドラマに転じて美化されてしまうことに危惧を感じます。国内で戦争が恒常化していた無秩序の時代が、いい時代だったはずがありません。そうした乱世を収めて秩序を取り戻し、国家として日本は一つなのだと思いが認識する成熟した社会を作り上げたのが徳川家康なのです」と、歴史学者としての思いを語りました。

史料から推察できる徳川家康の業績は数多く、寒村だった江戸を100万人規模の大都市へと発展させ、鎖国で諸外国から孤立しようとも一國平和主義と個別的自衛権の構築を進め、国内に安定した統治機構を作り上げました。

優れた政治手腕に加え、強運の持ち主

でもありました。文禄・慶長の役(※)では、太閤である豊臣秀吉が西日本方面から多くの大名を出征させましたが、関東にいた徳川家康は遠方ゆえに出兵に至りませんでした。この戦いに加担しなかったことは、後に朝鮮や中国との関係回復に奏効したといわれています。

江戸周辺の年貢を低く抑えたことも、後にいい結果を生んでいます。農民たちの暮らしや気持ちに余裕ができたことから、家内制手工業の誕生と発展への素地が生まれました。歴史的に見ると、この時代に日本独自の技術や工法などが息づいたことは、結果的に外国から押し寄せてくる産業革命の波に対応する準備になったと考えられています。

**ハリネズミとキツネの二面性  
強いリーダーシップを発揮**

タヌキと称された徳川家康ですが、「動物に例えるならハリネズミとキツネ」と評した山内教授。これは、ギリシャの詩人アルキロソスの「キツネは多くのことを知り、ハリネズミは大事なことを一つだけ知っている」という言葉に基づいた、成功者が持つ資質に用いられる比喻です。「幼少の頃から波乱の人生を送ったからか、ハリネズミのような鋭さや独創性を持ちながら、それを隠して慎重に立ち回るキツネの狡猾さも身に付けていました。成功者に不可欠な忍耐力と決断力、さらには為政者としての懐の深さを兼ね備えていたことが、類まれなるリーダーシップにつながったと考えられます」と分析されました。

山内教授の穏やかで軽妙な語りにもながら、会場は約1時間の講義に聴き入っていました。講義を終えた山内教授に、大きな拍手が鳴り響く中、後援会から感謝の花束が贈られました。



歴史学者  
武蔵野大学国際総合研究所特任教授  
山内 昌之 氏

1947年、札幌市生まれ。北海道大学卒。東京大学学術博士。現在、武蔵野大学特任教授、東京大学名誉教授、ムハンマド5世大学(モロッコ)特別客員教授を務める。カイロ大学客員助教授、東京大学教養学部助教授、トルコ歴史協会研究員、ハーバード大学客員研究員、政策研究大学院大学客員教授、東京大学グローバル地域研究機構(IAGS)・東京大学中東地域センター長(UTCMS)などを経て、2012年3月に東京大学を定年退職。発展途上国研究奨励賞、サントリー学芸賞、毎日出版文化賞(二回)、吉野作造賞、司馬遼太郎賞を受賞。06年春、紫綬褒章受章。

※文禄・慶長の役

中国・朝鮮へと外征して、中国の歴代王朝の一つであった明国を制圧する野望を抱いた豊臣秀吉が、文禄元年(1592年)、慶長2年(1597年)の2度にわたって起こした戦い。